

Care & Communication

ケア&コミュニケーション



THE FRONT LINE

米国大学での
教鞭経験を生かし
質の高い歯科医療の
提供に取り組む

i-スマイル歯科クリニック 東京 院長
和田 圭祐 先生

P01-06



DENTAL REPORT

堅実に成長する
地元密着型の歯科医院。
患者一人ひとりを大切に
信頼の輪を広げる

やまぐち歯科クリニック 院長
山口 正人 先生

P07-12



INSIDE REPORT

全身を診る診療の
幅を広げ
持続可能な歯科医院として
グループを形成

医療法人メディスタイル 理事長
徳永 淳二 先生

P13-18



DOCTOR'S TALK

Nd:YAGレーザー誌上講座

Nd:YAGレーザーによる臨床
Part2

上北沢歯科 四谷三栄町歯科 院長
行田 克則 先生

P19-22



米国大学での 教鞭経験を生かし 質の高い歯科医療の 提供に取り組む

和田圭祐院長は15年間の滞米中、大学院で博士号を取得し、2つの大学で教鞭をとってきた。日本で開業した経緯や日米の治療の違い、今後について伺ってみた。

i-スマイル歯科クリニック 東京 院長 和田 圭祐 先生



周囲からの応援を力に 難関大学院への留学を決意

「i-スマイル歯科クリニック 東京」があるのは、渋谷区のなかでも住宅が多い東北沢駅から徒歩1分ほどにあるマンションの1階だ。2020年4月に開業したばかりだが、すでに600人以上の新患が訪れている。

「新しい歯科医院ができたから」と受診する近隣の患者もいるが、インプラントと歯周病を専門とする和田圭祐院長の知識と技術を求めて、他の一般歯科医院や矯正歯科から紹介された患者も多い。

その信頼の高さは、経歴を伺うとうなずける。広島大学歯学部を卒業後、名古屋大学医学部大学院に進学。大学院の在学中に渡米し、1年間、ハーバード大学歯学部大学院で客員研究員の立場で学んだ。

いったん帰国するも、「さらに深く学びたい」という意欲に突き動かされ、ハーバード大学歯学部大学院を受験。難関を突破し、再び渡米。同大学院の博士および歯周病専門医課程で4年間学び、歯学博士を取得したのち、ペンシルバニア大学とテンプル大学の2つの歯学部で准教授ならびに主任教授を務めた。そして2019年、15年間の滞米を終えて帰国し、東京での開業に至っている。

海外留学は珍しくないが、和田院長のように大学院

に進学し、歯周病インプラント学講座の主任教授となった日本人歯科医師は和田院長が初めてである。歯科医師を目指してから、アメリカでの経験を経て、日本で開業するまでの道のりを和田院長は、「運がよかったとしか言いようがない」と語る。

「目の前で扉が次々と開き、それに導かれるように進んだという気持ちです。留学と教職のため、アメリカに長期滞在できたのは、一つに歯科医師である父を始め、家族の応援があったからです。うちは祖父や叔父も歯科医師の一家なのですが、父は『まだまだ元気で診療できるから留学してこい』と背中を押してくれたのです」

そして、もう一つ、恩師の励ましも支えになった。大学時代、父に同行し、アメリカのインプラント学会を見学したことがきっかけで、留学を夢見るようになった和田院長は、日本の大学院に進む際、留学に理解のある教授のもとで学びたいと考えた。名古屋大学大学院を進学先に選んだのは、再生医療・顎顔面外科を専門とする上田実教授に師事したかったからだ。

「大学院の入試面接で上田教授に留学への夢を話したら、『それはいい』と応援してくださったんです。ハーバード大学の大学院に合格したときも、快く医局から送り出してくださいました。先生からいただいた数々の言葉は、ずっと心の支えになっています」



4台のチェアはすべて個室仕様

最先端のインプラントを 求めてアメリカを選択

和田院長が歯科医師を目指したのは、祖父も父も歯科医師という育った環境の影響が大きい。歯学部で学んでいるときも、1、2年生の頃は、父の跡を継ぐために、という気持ちが強かった。

その意識を変えたのは、大学3年のときに遭遇した祖父の死だ。インプラントが顎骨に混じっていた。「父が祖父に入れたものでした。そのおかげで晩年までおいしく食事ができたこと、亡くなってからもなお体に残るインプラントの永続性に衝撃を受け、もっと学びたい、

極めたいと思うようになったのです」

しかし当時、日本のインプラントは手探り状態。興味を持った歯科医師が自主的に海外で研修を受けたり、学会に参加して情報を得るような時代だった。

「ハーバード大学の大学院に1年間、留学したことも刺激になりました。日本では受けられない教育内容やずっと先に行く臨床を間近で見たことで、より深く専門的に勉強したいと考えるようになったのです」

帰国した和田院長は、本格的な留学に向けて準備を始めた。まずはなんといっても語学力だ。和田院長は「歯科そっちのけで英語の勉強をしました」と笑う。

1年間の留学だけでも、相当な知識と技術の蓄積になるのではないかと考えられるが、さらに大学院での



部屋によって内装と機器の仕様が異なる

勉強を選択したのには理由がある。アメリカでは当たり前になっていた治療の永続性や再現性に対する視野の広さと知識を身につけたいという目標があった。

今でこそ日本も自費診療の率が上がり、質の高い治療を求める患者が増えているが、15年前は保険診療が中心。「噛むことができる治療」を万人に行うのが歯科の基本だった。

しかし、アメリカでは口腔が長期的に安定するかどうかまで目を光らせ、再現性を重視して計画を立て、実行していた。しかも、日本ではなかなか目にする事のないハイレベルの治療が当たり前に行われている。「日本でも歯科医療が高度化・専門化し始め、高齢化も進んでいました。アメリカでの歯科治療は日本でも

将来、実践されるようになって考え、勉強の必要性を痛感したのです」

それにしても、なぜアメリカだったのだろう。インプラントを学ぶにはスウェーデンという選択肢もある。

じつは和田院長には憧れの歯科医師がいた。歯周病専門医として世界的に知られる元アメリカ歯周病学会会長でハーバード大学教授のマイロン・ネビンス先生だ。愛読していた専門書の著者だった。

「ネビンス先生は、インプラントにおける歯周病治療の大切さをいち早く啓蒙された方です。ハーバード大ではネビンス先生の治療を実際に見たのですが、本の内容通りだったことに、あらためて衝撃を受けました」

治療方針一つで、予後がまったく変わってくること。



受付の隣にあるカウンセリングルーム

そのために臨床治療に欠かせない知識と技術を和田院長は最前線の環境で学んだのである。

日本人らしさを貫き 周囲からの信頼を得る

ハーバード大学の大学院を修了後、アメリカに留まり、教員として働くことになったのは、和田院長の誠実な人柄の影響が大きい。

海外、とくに欧米で日本人が働く場合、語学力や人種の壁を乗り越える必要がある。和田院長は、その壁を「あえて日本人らしさを貫く」ことで乗り越えた。「私ができることは、謙虚に真摯に取り組むことでした。始業時間の30分前に行って掃除をするなど、一緒に働く人たちが快く過ごせる環境づくりを手伝う。あるいは、患者さんの目線に立ち、理解していただけるまで、じっくりお話する。治療内容も正直にお伝えし、患者さんに選択してもらう。日本人なら当たり前持っている真面目さや正直さ、誠実さを大切に仕事をしたことが高く評価されたのだと思っています」

和田院長は自身のことを「打たれ強い性格」と評する。

失敗も多々あったが、引きずることなく、つねに高い目標に向かって努力し続けたことが、ペンシルバニア大学での評価や、2015年アメリカ歯周病学会財団が選ぶ歯周病学の将来を切り開く若手歯周病専門医25人に選出されたこともテンプル大学歯学部で学長からの教授への推挙につながったという。

「最近では私の姿を見て、アメリカの大学教授になりたいという若い先生も増えてきました。いずれ歯科の世界も、日本人選手が当たり前のように活躍する大リーグのように変わっていくでしょう。私の経験を高い意欲を持つ先生方に役立ててもらいたいと考えています」

若手の育成に力を入れ 日本の歯科医療の発信拠点に

「i-スマイル歯科クリニック 東京」はチェアが4台あり、すべて個室タイプだ。アメリカでの治療経験から、和田院長はプライバシーを守る個室にこだわった。

また内装もアイボリーやグレートーンを基調にしたシンプルなデザインながら、壁やドアなど、あちこちにアメリカンスタイルのゆったりとした品のよい雰囲気漂う。



カウンセリングルームでは話しやすさを考えて横並びに座る



クラスBの滅菌設備などを備えた準備スペース



CTを備えたレントゲン室

日々の診療において、和田院長はとくに日米での大きな違いは感じないという。しかし、アメリカではインプラントと歯周病の専門医だったため、訪れる患者の目的がはっきりしていた。一方、日本ではさまざまなニーズを持った患者が受診する。その幅広いニーズへの対応を学んでいる途中と話す。

「どうしたら患者さんに満足していただける会話ができるか、勉強の毎日です。それも新しいチャレンジと捉え、興味深く取り組んでいます」

「i-スマイル歯科クリニック 東京」に座っていると、不思議と居心地がよく、安心できる空気に包まれる。取材に伺ったのは、開業から7カ月ほどの11月だったが、院内はとても開業したばかりとは思えない落ち着いた雰囲気だった。これも和田院長の経験と人柄ゆえなのだろう。

これからさらに患者が増えそうな同クリニックだが、和田院長は治療だけでなく、若い歯科医師との交流の場に育てていきたいとも考えている。

「教えることが好きなんですよね。東京を開業地にしたのも、クリニックを世界に向けての発信拠点にしたいという夢があるからです。教授時代と同じように、若い先生方と一緒に症例を検討したり、研究することを大切にしていきたい。新しい医療につながるヒントを出し続けたいと思っています」



和田圭祐院長とスタッフのみなさん

PROFILE

和田 圭祐 先生

●1996年 広島大学歯学部卒業 ●2001年 名古屋大学医学部口腔外科大学院修了。医学博士 ●2008年ハーバード大学歯学部大学院 歯周病学修了。PhD取得 ●2012年 ペンシルバニア大学歯学部 歯周病学講座准教授 ●2015年 テンプル大学歯学部 歯周病・インプラント学講座主任教授。広島大学歯学部 顎顔面外科学講座客員教授 ●2016年 ペンシルバニア大学歯学部 歯周病学講座客員教授 ●2018年 テンプル大学歯学部 歯周病・インプラント学講座客員教授 ●2019年 東京医科歯科大学 歯周病学講座非常勤講師 ●2020年 i-スマイル歯科クリニック 東京開業 ●アメリカ歯周病インプラント外科専門医 ●アメリカ歯周病学会認定医

i-スマイル歯科クリニック 東京 住所:東京都渋谷区上原3-31-19 1F TEL:03-6407-8776 HP:https://www.isd-tokyo.jp



アイボリーとグレーのツートンカラーの外観



手描き風の温かいイメージのロゴ

堅実に成長する 地元密着型の歯科医院。 患者一人ひとりを大切に 信頼の輪を広げる

「やまぐち歯科クリニック」は2019年4月、長野県松本市に開業。ファミリー層を中心に地元を大切にする歯科医院のこれまでの歩みを伺った。

やまぐち歯科クリニック 院長 山口 正人 先生



夫婦で力を合わせ 第二の故郷に開業

「やまぐち歯科クリニック」は、松本空港に近いJR篠ノ井線村井駅が最寄り駅だ。

松本歯科大学の歯科補綴学講座で講師を務め、長く研究職にたずさわった山口正人院長が、開業を考え始めたのは2014年頃。山口院長は三重県出身だが、「第二の故郷」と感じている松本市での開業に迷いはなかった。

「松本歯科大学は私だけでなく、歯科衛生士である妻の母校でもあります。先輩方の多くが周囲で開業していますし、何か困ったことがあれば、すぐに相談もできるという安心感があります。夫婦で力を合わせて歯科医院を開業するには最適の地でした」

ところが、難航したのが開業地だ。現在の場所が見つかるまで、2年ほど探し続けることになった。

「やまぐち歯科クリニック」があるのは、周囲にりんご畑も散見する自然豊かな地域だ。

一見すると、すぐに開業地は見つかりそうだが、農地の転用が難しいことや歯科医院として必要な敷地の広さ、幹線道路からのルートなどを検討すると、なかなか好適地が見つからなかった。

「今の場所は探し始めた頃から好感を持っていたのですが、遺跡物が発掘されてしまったんです。そうすると、遺跡調査のために数年間は売買ができません。仕方なく他の場所に目を向けたのですが、なかなか条件に合う土地がないんです。市の中心地にあるオフィスビルも考えましたが、将来性を考えると、やはり敷地が広い一軒家のほうがいい。迷っているときに運よく、再びこの場所が候補地として紹介されたので、決断しました」

患者一人ひとりを じっくり診る方針を徹底

「やまぐち歯科クリニック」は、外観から内観までシンプルなデザインで統一されている。まず外観は、アイボリーと濃いグレーのツートンカラーになっており、近隣からもよく目立つ。

受付や診療室も、上品な色調のアイボリーだ。治療の器具や消耗品がしっかりと整理整頓されているので、空間にゆとりがあるのも心地よい。

現在、チェアは3台だが、床下の配管は5台まで増やせるように設置されている。また、敷地面積は建物を増築することも可能な広さがある。

「オープン前に設けた内覧会には、近隣から大勢の方に



歯科用グッズも分かりやすく配置した受付



広々とした玄関



白木を多用した清潔感のある待合室

来ていただくことができました。みなさん、新しい医院には興味があるんですね。建設中の建物の壁に「歯科医院オープン」の貼り紙をしていたことも効果的だったようです。ただ、開業したては、院内のオペレーションも試行錯誤の段階です。最初から予約をたくさん受けてしまうと、質の高い対応ができるかどうか、心配があったので、3～4人の患者さんからじっくりと始めました」

開業から1年半が経過した今、1日の患者数はメンテナンスも合わせて23人ほど。子どもからお年寄りまで幅広い年齢の患者が訪れている。

診療にあたるのは山口院長と、奥様の美鈴さんを含めて歯科衛生士が2人、受付を兼ねた助手が2人だ。

「大切にしているのは、患者さんの目線を大切にじっくり診る姿勢です。予約は1人1時間を取るようになっていますし、説明するときも患者さんの目を見て、理解度を確かめながら話を進めています」

オールマイティな治療技術が 求められる開業医

補綴を専門とし、大学ではインプラントも多数、手がけてきた山口院長は、開業後、治療については、とくに困ったことはない話す。



天井高があり、明るい光が差し込む、ゆとりあるチェアまわり

強いてあげれば、開業医にはよりいっそうのオールマイティな知識と技術の積み重ねが必要と感じているようだ。「大学時代は専門の先生にすぐ質問や相談ができる環境でしたが、今は自分一人です。どんな治療も素早く解決していくことが大切です。その意味では、根管治療に関して、もう少し勉強が必要と感じています」

そしてもう一つ、山口院長が課題と考えているのが、子どもの治療だ。大学時代は子どもの患者を診る機会が少なかったからだ。

「小児歯科に慣れていないことは開業前から気になっていたのですが、代診として働くときも、子どもの治療が多い歯科医院を選ぶようにしていました」

現在、「やまぐち歯科クリニック」に通院している小児患者の傾向を伺うと、家庭での口腔管理がしっかりしている子どもがいる一方で、虫歯が多い子どもも珍しくないという。

そうした子どもと親たちに、歯科への恐怖心を抱かせずに定期的に通院してもらい、治療や予防への関心を高めてもらうには、コミュニケーション力が問われる。「もっとも心がけているのは、無理強いほしくないということです。子どもの気持ちを大切にして、チェアに座ってもらうだけだったり、口に水をためてすすぐトレーニングだけで帰すこともあります。私も小学4年生と2年生の子どもを持つ親ですし、子どもの気持ちに寄り添って



チェアはパーテーションで仕切っている



自然光がやわらかに差し込む明るく広々とした診察室



チェアの一角にキッズスペースも用意

あげたいんです。とはいえ、子どももタイプがいろいろ。接し方は日々、勉強ですね」

リアルなコミュニケーションと 堅実な歩みを重視

2020年は新型コロナウイルス感染症の流行によって、影響を受けた歯科医院も多い。「やまぐち歯科クリニック」はどうだったのだろうか。

「人が密に集まることも少ない地域ですし、メンテナンスの患者さんが若干、受診を控えたくらいで、大きな影響はありませんでした」と山口院長は話す。

それでも、こまめに空気を入れ換えたり、受付にパーテーションを設置したり、来院患者に検温してもらうなど、

感染予防には気を配っている。

また、日頃から一人ひとりの患者ををていねいに診察していたことがクリニックへの信頼につながったことも見逃せない。

「私の理想は、患者さんに末永く通ってもらう歯科医院になることです。年代を問わず、どの患者さんにも何かあったら頼ってもらいたいと考えて日々、診療にあたっています」

そのために大切にしていることが、目の前の患者さんとおつねに真摯に向き合うことだ。保険診療の患者さんでも、ベストな治療の提供に最善を尽くす。また、包み隠さず情報を提供することも心がけている。その上で患者に選択してもらうことが、治療への信頼感には欠かせないと考えているからだ。

さらに、今は虫歯の治療で通院していても、先々は



すっきりと整理整頓された準備スペース



院内の歯科技工室



レントゲン室

メンテナンスを目的に通院してもらえるように、予防の大切さを分かりやすく啓蒙していきたいという思いもある。「やまぐち歯科クリニック」のユニークなところは、そうした患者とのリアルなコミュニケーションを重視していることだ。

新規開業の歯科医院では、ホームページやSNSを活用したネット情報の発信に力を入れるケースも多いが、同クリニックのホームページは情報を絞り、あっさりとした作りになっている。

「私自身がインターネットやデジタル機器にあまり興味がなくて……。これから力を入れていきたいですね」と山口院長は苦笑いするが、その控えめな姿勢が、むしろ情報過多の時代において新鮮な印象も受ける。

山口院長の話の伺っていると、歯科医院が一步一步、足元を確かめながら成長していることが分かる。とても堅実な歩みだ。

「今後は1日の患者さんの数を、30人前後まで増やすことができればと思っています。最近では訪問診療に取り組む歯科医院も増えていますが、うちの場合は、歯科

医師が私一人です。積極的に取り組むとしても、勤務医を増やすなどの工夫が必要になります。訪問診療は院内の診療とのバランスも考えながら徐々に、ですね」

新型コロナの影響もあり、時間の流れがスローになりつつある今、地元密着型の歯科医院のあり方として、「やまぐち歯科クリニック」のような取り組みは、一つの参考になるのではないだろうか。



山口正人院長(前列左)と奥様の山口美鈴さん(前列右)と、スタッフのみなさん

PROFILE

山口 正人 先生

●2002年 松本歯科大学卒業。同大総合診療科勤務 ●2005年 同大歯科補綴学講座助手 ●2018年 同大歯科補綴学講座講師 ●2019年 やまぐち歯科クリニック開業 ●日本歯周病学会 ●日本補綴歯科学会 ●日本口腔インプラント学会

やまぐち歯科クリニック

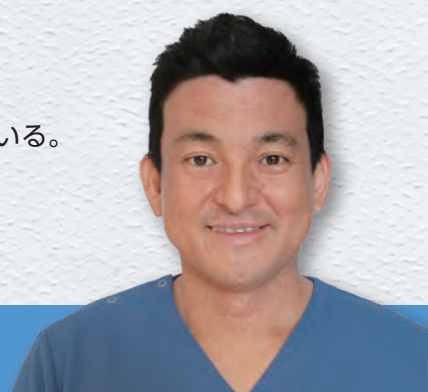
住所:長野県松本市村井町南2-6-20 TEL:0263-88-9003 HP:<http://www.dc-yamaguchi.net/>



全身を診る診療の幅を広げ 持続可能な歯科医院として グループを形成

「逗子メディスタイルクリニック」は全身から診た治療を重視している。
歯科だけでなく、医科の病院も含める形で
医療法人として設立した経緯や理由を伺ってみた。

医療法人メディスタイル
逗子メディスタイルクリニック 理事長 徳永 淳二 先生



歯科と医科のクリニックが 医療法人グループを構成

神奈川県にある「医療法人メディスタイル」は、「逗子メディスタイルクリニック」を中心に、歯科と医科の複数のクリニックで構成される医療法人だ。

グループの核になるのは、JR逗子駅前のオフィスビルにある「逗子メディスタイルクリニック」。4階が歯科、3階が医科になっている。歯科は徳永淳二理事長が診療し、3階は美容皮膚科・形成外科・皮膚科医である奥様の徳永理恵院長の診療フロアだ。

そして、「逗子メディスタイルクリニック」が自費のみの診療であることから、近くに開院したのが分院の1つ、「逗子みんなのための歯医者さん」だ。保険診療を中心に、より幅広い層の患者が通院している。

また、隣町の三浦郡葉山町には「葉山こどものための歯医者さん」があり、施設内には「葉山皮膚科・アレルギー科」が併設されている。さらに、このクリニックの近くには「葉山耳鼻咽喉科・アレルギー科」もある。

「私と妻は東京医科歯科大学のサークル活動で出会いました。その頃からの付き合いを通して医師として人間として、お互いに成長する過程のなかで、力を合わせれば、よりよい医療ができるのではないかと考えていました。そこで、医科歯科連携の形で2010年に『逗子メディスタイルクリニック』を開業したのです」と徳永淳二理事長は話す。

じつは、「逗子メディスタイルクリニック」を開業した頃は、分院を作る構想はなかった。理恵院長が乳がんを

患ったことをきっかけに、徳永理事長は医師としての将来を考えるようになったという。

「体が資本のドクターは、リスクの高い職業です。一人で抱え込むのではなく、持続可能な形でクリニックを継続させなければならないことと、診療を行っていく中で人間の奥深さを感じ多様な視点からより幅広く診ていく重要性に気づきました。そこで、複数のクリニックを設立し、仲間となってくれる各施設の院長と協力し、グループ化していったのです」

歯科と医科が連携し 不調の改善に取り組む

「逗子メディスタイルクリニック」の特徴は、歯科と医科が連携し、診療にあたっていることだ。たとえば、金属アレルギーの場合、ノンメタル素材に替える治療を行ったり、美容皮膚科や形成外科に顔面のシワやゆがみで訪れた場合は、歯科矯正などで咬合を整える治療を行うこともある。

徳永理事長が全身を考えた治療に取り組むようになったのは、理恵院長の影響が大きい。そしてもう一つが勤務医時代の経験だ。歯牙と歯肉を教科書通りに治療しているのに、納得できる結果が得られない。何か腑に落ちない感覚が残った。

当時は、インプラントが普及し始め、オールセラミッククラウンやファイバーポストでのメタルフリー治療が可能になるなど、新しい材料や治療法が次々と登場した頃だ。歯周病も抗菌療法などの論文が発表され始めた頃だった。



診療室はプライバシーが保てる個室タイプ



椅子タイプのチェアを使用



「ちょうど鶴見大学歯学部附属病院にアンチエイジング外来を開設した斎藤一郎先生に教えていただく機会があり、全身の抗加齢医学からみた歯科医療のあり方を研究することになりました。そのおかげで、それまで口腔全体を考えているようで、じつは歯牙や歯肉しか診ていなかった自分に気づくことができたのです」

現在、「逗子メディスタイルクリニック」では日常的に歯科と内科との連携による治療が行われている。原因が特定しにくい皮膚疾患の原因が、口腔内の慢性炎症だったことも珍しくない。

耳鼻科とも摂食嚥下障害、上顎洞炎、顎関節症、口腔機能発達不全につながる鼻呼吸の改善など、さまざまな症例で連携している。また口腔の形態や機能は、脳機能を含めて言語や聴覚と関係することも多く、言語聴覚士の役割もひじょうに大きいようだ。

「逗子メディスタイルクリニック」の階下の医科フロアでは、漢方外来や鍼灸外来などの診療科目もある。歯科の患者でも、食いしばりや肩こりが強く、噛み合わせに影響している場合などは、常勤している鍼灸師の治療を勧めることも少なくない。

「漢方薬で体質改善したり、鍼灸治療で症状がやわらぐことで唾液の分泌量が増えて、口腔環境が変わることはよくあります。ドライマウスの患者さんには、そういった体のメンテナンスも効果が高いと感じています」

口腔機能と全身の診断を中心に 患者とじっくり向き合う

「逗子メディスタイルクリニック」の患者は逗子市や



ブラッシングコーナーの一角に安静用チェアがある



遊具が揃った広いキッズ専用ルーム(保育士常駐)



CTを完備したレントゲン室



携帯型の治療ユニット
や嚙下内視鏡、レント
ゲン、専用訪問車など
を揃えている

葉山町を中心に40~60代が多い。男女比に差はなく、横浜や東京、浜松から来院する患者もいる。多くの患者は悩みが深く、あちこちの歯科医院をめぐり、たどり着いている。総合的に相談したいという主訴が最も多い。

開業6年目から、初診は紹介の患者に限っている。来院数が増え、1人1時間の診療を目安に1日7人の患者とじっくり向き合うスケジュールの確保が難しくなってきたからだ。

患者たちが「逗子メディスタイルクリニック」を頼る理由の一つに、インプラントがある。徳永理事長は開業する前の臨床経験8年目のとき、スウェーデンのイエテボリ大学モルンダル病院でインプラントの研修を受けた。インプラント臨床を中心に口腔外科の知識と技術を学んだという。

「留学できたのは、当時のアストラテック社長との縁がきっかけでした。病院の外来ではインプラントの症例が多く、2年目の研修医でも指導医や他の専門医と議論を交わしながら、口腔全体の診断を踏まえ、サイナスリフトなど、GBRを含めたオバを短時間で次々と行っていました。それを目の当たりにしたとき、自分のなかで、いろいろな思い込みの壁が崩れた気がしたのです」

当時の日本では、インプラントは普及の途上。一部の歯科医師が手がける特別な治療だった。ところが、スウェーデンでは、自分より経験の浅い歯科医師が手術に取り組んでいる。その姿に徳永理事長は、目が覚める思いだった。

「帰国し、開業してからはインプラント専門外来として積極的に取り組みました。また、歯周病の治療とメンテ

医療法人メディスタイル

逗子みんなのための歯医者さん



院長は野村太郎先生で、日本補綴歯科学会専門医指導医。保険診療を中心に幅広い層の患者が治療を受けている。クリニックの内装は海や砂浜をイメージし、とくに小児歯科の専用スペースには楽しげな雰囲気が漂う。成人歯科のスペースは、クルーザーをイメージしている。

住所：神奈川県逗子市逗子5丁目3-30 ハウス逗子海岸1階

ナンスに力を入れ、インプラントを長持ちさせることも重視しました」

現在は通院患者の半数はメンテナンスだ。遠方に住む患者も、メンテナンスのために通っているケースが多いという。

医療と食を通じて 地域の健康を支えたい

現在地に開業したのは、理恵院長が鎌倉市の出身だったことが大きい。開業から10年が経過し、徳永理事長は地域医療に貢献したいとの気持ちが強くなってきている。その現れの一つが、5年前から始めた訪問診療だ。嚥下内視鏡と嚥下造影検査装置を備え、訪問歯科での摂食・嚥下リハビリテーションに取り組んでいる。

「私も訪問診療は手探り状態でしたから、東京医科歯科大学大学院 地域・福祉口腔機能管理学に入学し、古屋純一先生にご指導をいただき、老年歯科医学会認定医の資格を取るなど、研鑽を積んでいるところです。2年前からは、訪問専用車2台で、在宅を中心に介護施

設も訪問しています」

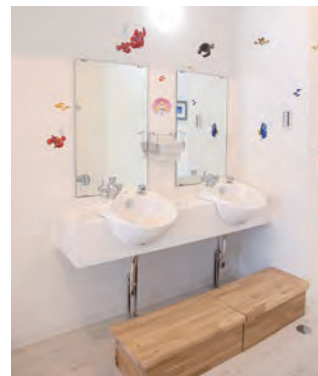
その努力と実績が認められ、クリニックは日本老年歯科医学会認定医と専門医の研修施設になった。2020年2月には、論文や活動に対し、東京医科歯科大学から感謝状が贈られたという。

徳永理事長は、子どもの歯へも強い関心を持っている。乳幼児の頃から正しく歯を守っていれば、将来、インプラントは不要かもしれない。また、歯の健康が成長にも影響することがある。そうした思いが小児歯科を中心にした他のクリニックの立ち上げにつながった。

「『葉山こどものための歯医者さん』は究極の予防を求めて開業しました。このクリニックでは小児の在宅歯科治療などにも力を入れています」

最後にもう一つ、「医療法人メディスタイル」のユニークな取り組みを紹介しよう。じつは、2017年から飲食店も経営している。新鮮な地元の食材を使い、栄養バランスを考えた家庭料理の店だ。

「摂食・嚥下リハビリテーションを始めたのをきっかけに、嚥下食に興味を持ち、食べることを支えたいとオープンしました。私と妻は、3人の男の子を育てていますし、食を通じて健康な社会を支えることはとても大切と考えています。また、スタッフの健康も組織のリーダーとして



小児歯科専門医指導医の佐々木康成先生が院長を務めている。「こども矯正」や「食べること・話すこと外来」を設け、発達に合った歯科治療を提供。障がいを持っていたり、心のケアが必要な子どもたちの診療にも窓口を開いている。

住所：神奈川県三浦郡葉山町長柄889-1 1F

守らなければなりません。そのために、クリニックの社員食堂としても活用しています」

「医療法人メディスタイル」の多面的な運営は、さまざまな形で地域の人々を支えている。徳永理事長は、今後は在宅やオンラインなどの診療環境の変化にも対応していきたいと語る。

「少子高齢社会が進むなか、すべての人が安心して暮らすために、歯科医療が果たす役割はとても大きいと感じています。とくに子どもの歯は、しっかりと守ることが必要です。将来、すべての歯科医院が小児歯科にも力を入れる時代が来て欲しいとも願っています。私たちのグループは、クリニックで患者さんを健康にするだけでなく、医院を

飛び出して、社会全体を明るく元気にするような活動をしたと考えているのです」



徳永淳二理事長（前列右から3番目）と理恵院長（前列右から4番目）と、スタッフのみなさん

PROFILE

徳永 淳二 先生

- 2002年 東京医科歯科大学を卒業。勤務医に
- 2010年 スウェーデン・イエテボリ大学、モーランドル病院にて研修
- 2010年 「逗子メディスタイルクリニック」開業
- 2020年 東京医科歯科大学大学院 地域・福祉口腔機能管理学修了
- 日本抗加齢医学会専門医
- アストラテックインプラント認定医・専門医
- 日本老年歯科医学会認定医
- 日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士
- 日本歯周病学会
- 日本再生医療学会
- 日本接着歯学会
- 日本矯正歯科学会

医療法人メディスタイル
逗子メディスタイルクリニック

住所：神奈川県逗子市逗子1-5-4 128ビル 4F TEL:046-871-8333 HP:<https://www.medi-style.jp/>

Nd:YAGレーザーによる臨床

Part
2

行田克則先生が講師を務めるNd:YAGレーザーを用いた症例解説の第2回目。

前号の「C&C」52号では歯根破折歯について、Nd:YAGレーザーを用いることで炎症を回避した症例をご紹介いただいた。今号のテーマは、Nd:YAGレーザー照射後の骨再生法のなかでも特殊なアプローチ法と炎症の消退について、症例と共に解説していただいた。



PROFILE

上北沢歯科 四谷三栄町歯科 院長 行田 克則 先生

●1976年4月～1982年3月 日本大学歯学部 ●1982年4月～1986年3月 日本大学歯学部大学院
●1986年4月～2016年3月 日本大学歯学部非常勤講師 日本顎咬合学会編集委員 ●1988年～上北沢
歯科開設●1991年4月～1995年3月 日本補綴歯科学会評議員 ●1994年4月～2005年3月 日本顎咬
合学会常任理事 ●1998年4月～2001年 奥羽大学歯学部客員教授 ●2015年4月 デンタルダイヤモンド社
より「行田克則の臨床アーカイブ補綴メインの長期100症例」を上梓 ●2016年4月 日本大学歯学部臨床教授
●2020年1月 クインテッセンス出版より「攻めのクラウンブリッジ」を上梓

【所属学会】

■日本顎咬合学会 ■日本補綴歯科学会 ■日本歯科審美学会 ■日本口腔インプラント学会
■Academy of Osseointegration

症例 1

患者さんは右側第2大臼歯の保存を希望し、後輩歯科医師から紹介を受けた方である。図-01 は当院初診時の2020年1月11日の状態であるが、患者はプラークコントロールを適切に行っていたことより疼痛を訴える状態では無かった。当院の治療としては麻酔下にて1週間ごとに4回のNd:YAGレーザーを照射したが治療期間中も疼痛が出ることは無かった。レーザー照射により排膿および出血は収まり患者さんの違和感は消退し通常に食事ができるまで回復した。図-02 は初診から10ヶ月後

の2020年11月11日の状態であるが、初診時に観られた遠心根尖部の骨吸収像が改善していることが認められる。これをデンタルX線にて 図-03 図-04 に示すが、図-04 で明瞭な骨再生を認める。図-03 から 図-04 において炎症性の滲出液の減少が認められたため、破折歯根の間隙にフジIX (GC社製、図-05) を填入したことで細菌侵入が防げ、骨再生に至ったと考えられる。図-06 (ミラー面観) に口腔内の状態を示すが炎症兆候は認めない、また充填されたフジIXも観察される。

図-01



2020年1月11日

図-02



2020年11月11日

前回(C&C52号)はNd:YAGレーザーを用いた歯根破折歯の症例について解説した。
 歯根破折歯の破折線は主にストレスから来る咬合力により開閉することで、毛細管現象を惹起しそのポンプ作用により口腔細菌を根尖方向へ押しやり、歯肉固有層という閉鎖空間で炎症を起こし腫脹そして疼痛を引き起こすという特徴を有している。
 Nd:YAGレーザーにより付着(接合)上皮の代謝機能を向上させる事により白血球特に好中球の遊走が盛んになることで、侵入細菌を貪食することで炎症を回避できると想像出来る。

こうした原理からレーザーの照射は歯根面方向ではなく付着上皮方向に照射することが肝要である。

「歯根膜を大切にしつつ付着上皮の代謝を高める」といった感じでのアプローチが重要ではないかと考える。

今回は照射後の特殊な骨再生法と炎症の消退に時間を要した症例についてレポートする。



インパルス デンタルレーザー
 [Nd:YAGレーザー]
 医療機器承認番号
 21700BZY00507000

図-03



2020年3月4日

図-04



2020年11月11日

図-05

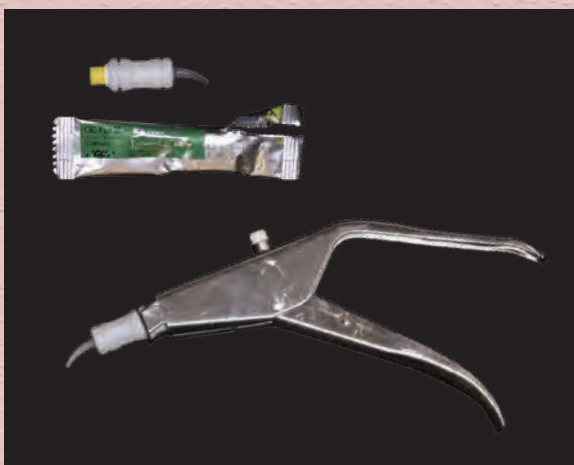
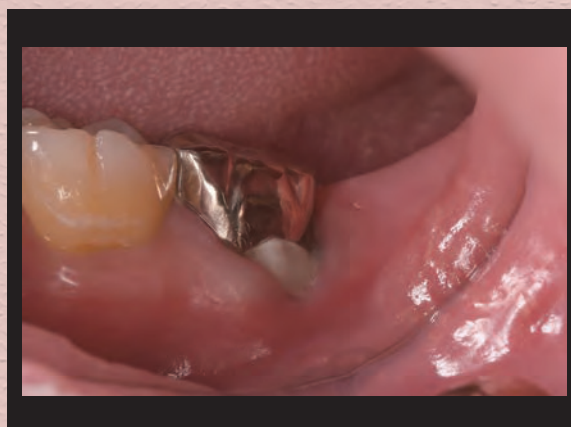


図-06



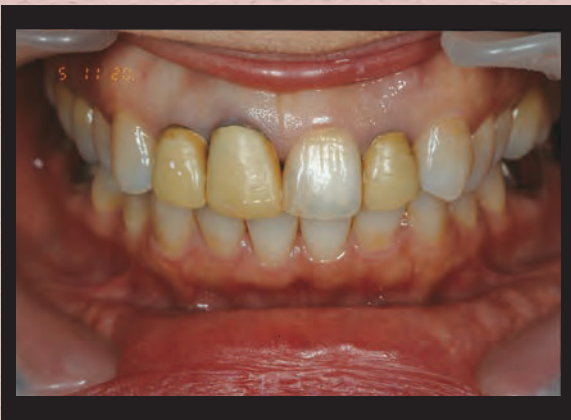
2020年11月11日

症例2

図-07 は上顎4前歯部の審美的改善を希望した患者さんの2002年11月5日の状態であるが、同時に撮影したデンタルX線(図-08)では右側中切歯および左側側切歯には穿孔を認めるが、特に左側側切歯の穿孔は大きなことがわかる。図-09 は初診時と穿孔修復後約3年のデンタルX線を比較したところであるが、穿孔修復後透過像の減少を認めるも完治には至っていないことが観察される。患者さんは年に1~2度違和感を訴え

ていた状態である。さて本題のNd:YAGレーザーによる治療だが、初診時から違和感訴える度に側切歯の骨欠損部と内歯癭(サイナストラクト)部位が一致していたため同部位より骨面に向かってレーザー照射を行っていた。図-10 は最終補綴物装着より4年の2006年11月29日の状態であるがこの段階でもサイナストラクトを認める。しかし患者さんに違和感はほとんどない状態が継続していたので、半年に1度のリコールの時のみ

図-07



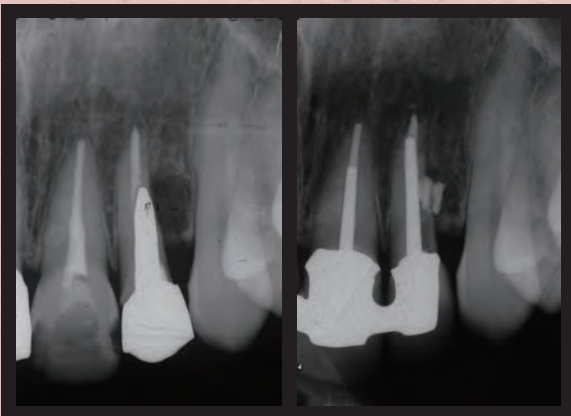
2002年11月5日

図-08



2002年11月5日

図-09



2002年11月5日

2005年6月1日

図-10



2006年11月29日

おわりに

一般的な診断として歯根破折は抜歯とされることが多いのではないだろうか。前回に引き続き歯根破折歯へのNd:YAGレーザーでのレスキュー症例を提示したが、今回の2症例目のようにしっかり診断が初期に下せなかった症例が存在するのも事実である。しかし抜歯の判断を早期に行っていたら正しい診断を

サイナストラクトよりレーザー照射を行なっているような状況であった。図-11 は約9年後の2011年7月4日の状態であるがやはり骨欠損とサイナストラクトを認める状態であった。この時まではナメタメソッドに従い歯根に対し垂直方向から骨欠損のみへのレーザー照射を行っていたが、臨床症状はないものの骨欠損に改善が認められないことより歯肉溝より歯根面を精査したところ穿孔部位に向かっての歯根破折が存在することが判明した。そこで歯根破折歯への対応に変更し付着上皮にレーザー光が当たるように照射法を変更することとした。

図-12 は照射法変更後約7年、術後16年の状態であるがサイナストラクトは消失し、相当部位が仮骨化し隆起していることを認めるようになった。その後内歯瘻を認めることはなくなった、図-13 は術後18年後の状態2020年10月19日である。同日のデンタルX線では外部吸収および槽間中隔の骨吸収を認めるものの炎症像が消退しているような像となっているように感じるが、さらに予後観察したい。ちなみに現在患者さんに違和感はない。

図-11



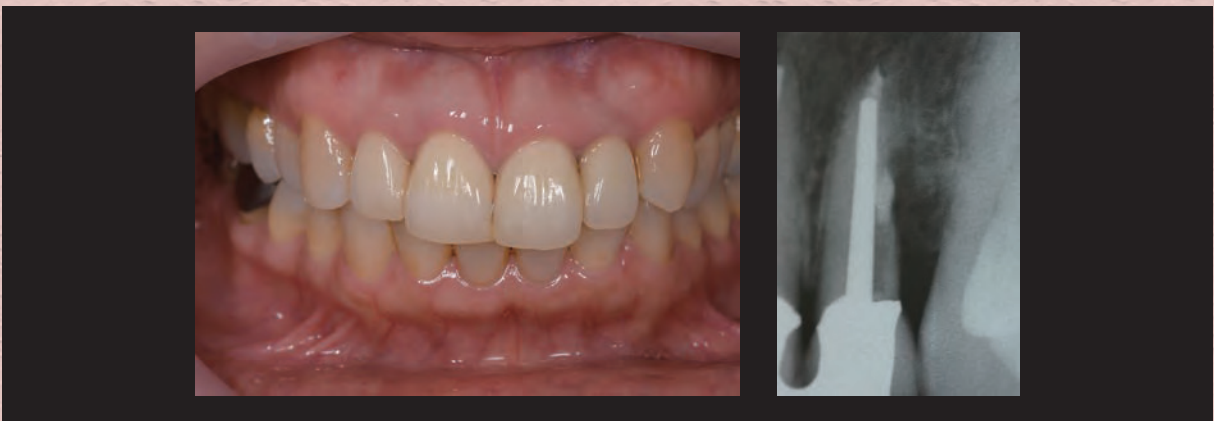
2011年7月4日

図-12



術後16年経過

図-13



術後18年経過 2020年10月19日

下すことは永遠にできないことになる。Nd:YAGレーザーはあくまでも補助的なツールであるし、その照射法に多様性もあり必ず治癒に導くことができる保証はない、しかし口腔細菌を相手とする我々歯科医師にとって細部に行き渡る有能な滅菌器具であることは確かである。

ササキホームページでは皆様のお役に立つ情報を公開中です。

ササキ株式会社
ホームページ
SASAKI CO.,LTD.



下記から、アクセスください。



C&C
ケア&コミュニケーション
CARE & COMMUNICATION



※バックナンバー掲載中



下記から、アクセスください。



歯科医院
新規開業・改装サポート
SASAKI STARTUP SUPPORT



SASAKI STARTUP SUPPORT

下記から、アクセスください。



 **SASAKI**
<https://www.sasaki-kk.co.jp>

SASAKI Care & Communication Vol.53 December 2020 お問い合わせ・ご意見:「C&C」事務局 細谷俊寛
FAX 0120-566-052 <https://www.sasaki-kk.co.jp>

発行:ササキ株式会社 東京都文京区本郷3-26-4 ササキビル4F

●本誌に記載された個人の氏名・住所・電話番号等の個人情報の悪用を禁じます。●本誌の記事・写真・図版等を無断で転載・複製することを禁じます。